

大学聖歌隊にしひがし

大学文学部比較芸術学科教授
那須輝彦
NASU Teruhiko



筆者は大学文学部比較芸術学科で音楽学（楽理や音楽史を研究する学問）を担当する教員であるが、専攻が教会音楽史であることもあって、二〇一一年度から大学聖歌隊の指導も仰せ

つかっている。聖歌隊の務めは、まずもって日々の大学礼拝や二年前から始められた日曜礼拝、そして大学の諸々の式典などに合唱をもって奉仕することであるが、プロの器楽奏者や独唱者をお招きして宗教音楽の大作を演奏する定期演奏会やクリスマスなどのキャロル礼拝のような特別な催しも開催し、それらは毎年ガウチャー記念礼拝堂の一階席が埋まるほどの方々にお越し頂ける恒例行事になっている。筆者自身が学部生時代と留学時代に聖歌隊員として培った経験をフル稼働させているわけであるが、その運営のモデルは、青山学院が背景にもつメソジス

分あたりから少年と大学生のオーディション場面が出てくるのでご覧になるとよい。六〜七歳の少年に「属七の根音省略の第三転回形」のような不安定な和音を弾いて「真ん中の音を歌ってごらん」などと要求している。大学生はブランク（一八九九〜一九六三）のモテットを初見で歌わされている。カレッジによっては聖歌隊の指導さえ任されるオルガン・スカラーのオーディションはさらに高度であって、たとえば筆者の留学時代のケンブリッジの募集要項を見ると、その試験課題は①バッハのトリオ・ソナタを弾く、②讃美歌を移調して弾く、③与えられたテーマで即興演奏をする、などである。日本の音大の大学院レベルである。

ただし大学生が聖歌隊に参加するようになったのは二〇世紀以降のことであって、それ以前のカレッジでは、一般の大聖堂（英国国教会の各地の主教座聖堂）と同じく、レイ・クラークと呼ばれるサーヴァント（雇員）がアルト、テノール、バスを歌っていた。中世の大聖堂では、多忙な上級聖職者に代わって日々の礼拝奉唱を

ト教会発祥の地イングランドの大学、わけでもオクスブリッジ（オクスフォードとケンブリッジ）の聖歌隊である。

オクスブリッジは諸学部の集合体であるユニヴァーシティと、学生が起居し個人指導を受ける三〇あまりのカレッジ（学寮）の二重構造からなる大学であるが、ケンブリッジのキングズ・カレッジとセント・ジョンズ・カレッジ、オクスフォードのクライスト・チャーチ、ニュー・カレッジ、モードリン・カレッジの五つは、付属の初等部で少年聖歌隊員を養成し、ボーイ・ソプラノとカウンターテナー（ファルセットで歌う男性のアルト）を擁する伝統的な聖歌隊を中世から維持し、その名声を誇っている。加えてケンブリッジのトリニティ・カレッジやクレア・カレッジの聖歌隊は女子学生を起用した混

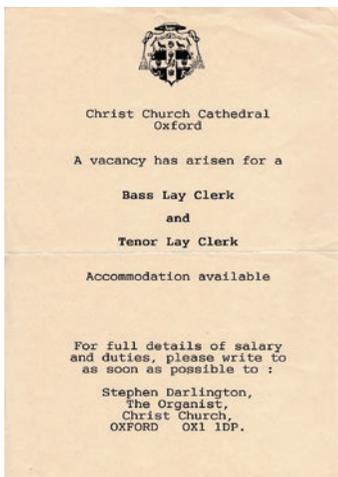


図1

主務とした下級聖職者を「クラーク clerk」と呼んだ。ルネサンス期に多声音楽が充実して聖職者だけでは演奏できなくなると、楽才のある俗人・平信徒が奉唱に加わるようになった。この俗人の聖歌隊員がレイ（平信徒の）・クラークである。当時からレイ・クラークは一種の副業であって、現在でも日々の拘束時間のわりに年収は一〇〇万円にも満たないから、大半は大聖堂付属学校の教員とか音大生などによってまかなわれているわけであるが、中世以来の大聖堂敷地内に住居が与えられたりする。図1はオクスフォード・クライスト・チャーチ（大学のカレッジであると同時にオクスフォード主教区の大聖堂でもある）の募集チラシであって、「バスとテノールのレイ・クラークに欠員あり。住むとこあります」とある。合唱王国イングランドの教会音楽はこの分厚いセミプロ層に支えられているのである。クライスト・チャーチと

声合唱団として頭角を現し、音楽誌の評論家選などで上位にランク・インしている。このハイ・スタンダードを実現し維持している大学聖歌隊のシステムを紹介してみたい。

オクスブリッジには音楽学部があるが、比較芸術学科と同じく音楽学や作曲を学ぶ場であって、そこに音楽科の学生がいるわけではない。各カレッジは入学試験時に奨学金を用意して、専攻を問わず優秀な聖歌隊員やオルガニストを募るのである——もちろん学科試験のハードルが低くなるわけではない。オクスブリッジでは学部生のことを「スカラー scholar」というので、選ばれた聖歌隊員はコーラル（合唱）（スカラー、オルガニストはオルガン・スカラーと呼ばれる。YouTubeで「BBC Close Harmony 2」の動画を検索して頂くと、三九

ニュー・カレッジはこの伝統を残していて、成人聖歌隊員の半数はカレッジの大学生であるが、残りの半数はレイ・クラークによって占められている。

さてわが青山学院大学聖歌隊。筆者は無論、右のような素地が皆無の非キリスト教国で、同様の環境を夢見るほどではない。が、それにして苦境である。男子学生は四年生ひとりしかない。この衰退は聖歌隊に限らない。筆者が学位授与式・入学式の指揮を始めた二〇〇〇年代初頭には、大学の諸合唱団が合同して男女八〇名くらいにはなったが、今では男子は四名だったりする。立教大学で同様の仕事をしているスコット・ショウ教授もここ数年で男子の激減をぼやいていたから、学生のクラシック系合唱界に地殻変動が起こっているのかもしれない。バッハやヘンデル、そしてルネサンス・ポリフォニーの真価は何年経とうと揺るぎないものであるし、事実、社会人の合唱界では男性も活躍しているから、学生には時期尚早ということか。はたまた古典的な人文教養教育を軽んじる某省のなせるわざか。

かくしてわが聖歌隊も、皮肉なことに本場イングランドよろしく、「レイ・クラーク」（OBなど）の助力を得て、なんとか礼拝奉仕をしんでいる。高等部・中等部の（とくに男子）生徒諸君、遠からず君たちの出番です！